

K-735

吉原Ⅱ遺跡

第3次発掘調査報告書

2003

株式会社ニラク
山形市教育委員会

よし はら に
吉 原 II 遺 跡

第3次発掘調査報告書

平成15年3月

株式会社ニラク
山形市教育委員会

序

本報告書は、平成14年度に実施された吉原Ⅱ遺跡の第3次発掘調査の成果をまとめたものです。

吉原Ⅱ遺跡は平成8年度に新しく確認された遺跡です。このたびの第3次発掘調査により、平安時代のものと考えられる柱穴や溝跡が検出されました。発掘調査の実施によって、当時の生活を物語る貴重な資料を得ることができました。

山形市内には、国指定史跡の「山形城跡」や「鳴遺跡」をはじめ、約300箇所の遺跡が確認されております。これらの遺跡は、山形市の歴史や文化を正しく理解する上で、欠くことのできない市民共有の財産となっています。

近年は市内各地区において様々な開発事業が進められており、埋蔵文化財保護を目的とした調整の結果、発掘調査に至る事例が多くなっています。吉原Ⅱ遺跡の発掘調査もそのような開発事業との調整の中で、遺跡の記録保存を目的として行われました。

本書が埋蔵文化財についての保護啓蒙のために、皆様の地域史探求の一助としてご活用いただければ、誠に幸いります。

最後になりましたが、調査にあたって埋蔵文化財の保護に特段のご理解をいただき、発掘調査に多大なご協力をいただきました株式会社ニラクや工事関係者の皆様、並びに関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成15年3月

山形市教育委員会
教育長 相田良一

例　　言

- 1 本書は株式会社ニラクの店舗建設事業に係る「吉原Ⅱ遺跡」の第3次発掘調査報告書である。
- 2 調査は株式会社ニラクの依頼により、山形市教育委員会が実施した。
- 3 調査要項は下記の通りである。

遺跡名 吉原Ⅱ遺跡（よしはらにいせき） 所在地 山形県山形市三つ江地内

調査主体 株式会社ニラク 調査実施機関 山形市教育委員会

調査期間 平成14年6月27日～7月31日（現場調査）

平成14年8月5日～平成15年3月31日（整理作業）

調査担当者 教育委員会社会教育課

課長 柳橋幸男 発掘・整理調査担当

課長補佐 江川 隆 文化財保護係主事 須藤英之・國井 修

文化財保護係長 小野 徹 臨時職員 小野幸寛

主任 武田和宏

- 4 本書の作成・執筆・編集は須藤英之が担当し、挿図作成において小野幸寛がこれを補佐した。
- 5 調査及び本書を作成するにあたり、以下の関係諸機関より御協力・御指導を得た。記して感謝申し上げる。（敬称略）太陽建設株式会社 山形市立第十中学校 斎藤 健 村木志伸（財）山形県埋蔵文化財センター
- 6 現場調査・整理作業にあたっては、以下の方々から御協力いただいた。記して感謝申し上げる。（敬称略）大貫文義 小野政雄 片桐長作 木村澄子 三部秋夫 白田 敬 鈴木清志 丹野一郎 戸田長生 土門弘 中村達久 布施哲二郎 町田雅樹 渡辺ふじえ（現場調査）伊藤桂子 木村澄子 武田昌子 深瀬美貴子 渡辺ふじえ（整理作業）
- 7 出土遺物・調査記録類については、山形市教育委員会社会教育課が一括保管している。

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は以下の通りである。
SB…掘立柱建物跡 SD…溝跡 SK…土坑 SP…柱穴 SX…性格不明遺構 TP…調査地点番号
- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号を報告書中においても踏襲した。
- 3 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は真北を示している。
- 4 遺構実測図は1/40・1/80の縮図で採録し、各々スケールを付した。
- 5 遺物実測図・拓影図は1/3の縮図で採録し、各々スケールを付した。
- 6 遺構実測図中の水糸レベルについては各図毎に統一して記載した。単位はmである。
- 7 土層観察においては、基本層序はローマ数字で、遺構覆土についてはアラビア数字で表している。
- 8 遺物実測図中の土器については断面黒ベタが須恵器、断面白抜きが土師器、網点は施釉陶器を表す。
- 9 遺構観察表中において、（ ）内数値は図面上の推計値を示す。単位はcmを使用している。
- 10 遺物観察表中において、（ ）内数値は図上復元推計値を、一は計測不能を示す。単位はmmである。
- 11 遺構・遺物番号は本文・表・表・挿図・写真図版とも一致させている。なお、遺構番号は（遺構番号）-（遺構ごとの通し番号）とした。
- 12 基本層序及び遺構覆土の色調記載については、「新版標準土色帳」（小山・竹原：1997）に依った。

目 次

I 調査の経緯と経過	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
III 発見された遺構と遺物	
1 遺跡の概観	5
(1) 遺跡の層序	5
2 遺構と遺物	5
(2) 遺構と遺物の分布	5
2 検出された遺構と遺物	5
(1) 柱穴跡	6
(2) 土杭・性格不明土坑	16
(3) 溝跡	16
(4) 表土層出土遺物	17
3 総括	17
(1) 調査の成果	17
(2) 平安時代の遺構・遺物について	17

挿 図

第1図 調査区概要図	3
第2図 遺跡位置図	3
第3図 調査地点配置図	7
第4図 T P 3・15~18・22~26平面図・セクション(1)	8
第5図 T P 3・15~18・22~26平面図・セクション(2)	9
第6図 T P 31~34平面図・セクション	9
第7図 T P 39~42・47~49平面図・セクション	10
第8図 T P 8・9平面図・セクション	10
第9図 S D10・S D11平面図・セクション	11
第10図 SP・SK・SD・SX・TP出土遺物	12
第11図 S D10・2層出土遺物	13
第12図 S D10・1層出土遺物(1)	14
第13図 S D10・1層出土遺物(2)	15

表

表1 調査工程表	1
表2 基本層序	4
表3 周辺遺跡一覧	4
表4 土層注記	19~20
表5 遺物分類表	21
表6 遺構観察表	21
表7 遺物観察表	22

図 版

図版1 表土除去作業風景、S P 36検出状況 他	他
図版2 T P 17検出状況、S P 29検出状況 他	他
図版3 S P 33完掘状況、S P 31セクション 他	他
図版4 S P 17セクション、S P 6セクション 他	他
図版5 S D10セクション、S D11セクション 他	他
図版6 出土遺物 1	1
図版7 出土遺物 2	2
図版8 出土遺物 3	3

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

吉原II遺跡は平成8年度に登録された遺跡である。その後、平成9年度に第1次、平成12年度に第2次の発掘調査が、吉原地区土地区画整理事業による道路建設に伴い実施されている。第1次調査において奈良～平安時代の掘立柱建物跡が整然と並び、溝に区画される集落の様相が検出されたことから、官衙的な様相を持つ遺跡として注目された。

今回の調査に至る経緯については、株式会社ニラクにより店舗建設事業が計画された。事業予定地が周知の遺跡「吉原II遺跡」に内に所在することから、開発事業者である株式会社ニラクと山形市教育委員会により埋蔵文化財の取り扱いについて協議が行われた。その結果、平成14年6月14日付で山形県教育委員会あて埋蔵文化財発掘の届出が提出され、掘削の及ぶ店舗部分については工事に先立ち緊急発掘調査を実施し、記録による保存を行う運びとなった。

調査の実施にあたり、開発行為の申請者である株式会社ニラクと山形市教育委員会の間で調査に関する協定を平成14年6月25日付で結び、山形市教育委員会が調査を実施することとなった。現場調査については平成14年6月27日～7月31日の延べ25日間の期間で実施された。整理作業については平成14年8月5日付で協定を結び、平成14年度中に報告書を刊行するものとして8月5日より実施した。

2 調査の方法と経過

調査区域については、店舗建設事業実施部分の内、建物の基礎杭が打ち込まれ造構面に掘削が及ぶ部分に限定した範囲を発掘調査の対象とした。さらに、調査開始時に調査区南東隅に土取り工事によると考えられる既掘削部分が確認され、併せて調査区域に含めるものとした。調査の方法及び経過は以下の通りである(表1)。平成14年6月27日より人力により調査区内の立ち木や雑草を除去し、平成14年7月1日より、人力で造構面までの掘り下げを開始した。造構検出面は調査区の東側でやや高く、西側に向かって緩やかに傾斜して低くなる状況であった。検出面の標高は約123mを測る。

事業者側の設計した図面を基準として調査区を設定した(第3図)。第1・2次の調査結果より、造構の分布が希薄と予想された調査区の西側から東側に向かって作業を進め、人力による表土除去、及び造構精査・記録作業に着手した。7月31日で作業器財の撤収までを含めた現地での調査を終了した。

表1 調査工程表

月	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5
週	4	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
環境整備												
表土除去												
遺構検出												
遺構精査												
記録												
備考		器附掘入										器附撤収

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

山形市は、山形県東部に形成される山形盆地内の南東部に位置する。東側には宮城県との県境となる奥羽山脈が連なり、市域の南部と西部には白鷹丘陵が据野を広げている。奥羽山脈に源を発する馬見ヶ崎川が北流し、南東から北西に伸びる扇状地を形成している。市内西部を須川が北流しており、その沿岸には自然堤防及び後背湿地が広がる。他にも、周囲の山々から流れる大小の河川が小規模な扇状地をつくり、複合扇状地を形成している。

吉原Ⅱ遺跡は山形市の南部、市街地中心部から約3km離れた山形市大字三つ江地内に所在する(第2図)。山形市街地は馬見ヶ崎川扇状地上に展開し、東の奥羽山脈から盆地西側を北流する須川に向かってやや傾斜する地形となっている。遺跡周辺の地形は東から西に向かって緩やかに傾斜する。標高は約123mを測る。

2 歴史的環境

山形市内では現在約300箇所の遺跡が確認されている。近年、各地域で土地区画整理事業等の開発事業が進展するに伴い、埋蔵文化財と開発との調整が増加してきている。

本遺跡周辺の吉原遺跡群では、大規模土地区画整理事業に伴い発掘調査が実施され、奈良～平安時代の時期を中心として、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が検出されている。特に吉原Ⅱ遺跡からは、平成9年度の第1次調査において、8世紀末葉～9世紀初頭の長軸約1mを測る掘り方の柱穴によって構成される掘立柱建物跡群が確認されており、その規模及び配置等から官衙的施設である可能性が検討された。併行する時期では、本遺跡の南西2.5kmに位置する石田遺跡から同規模の柱穴を持つ掘立柱建物跡群が検出されている。時期は下るが、本遺跡の南方1.5kmの須川右岸に所在する成沢西遺跡からは、10世紀前葉とされる掘立柱建物跡群が検出されている。

吉原遺跡群の南西2.5kmに位置する谷柏・本沢地区には多くの遺跡が点在し、縄文時代前期の百々山遺跡・後期の中谷柏遺跡が存在する。古墳時代では、多数の埴輪が出土した普沢2号墳を含む普沢古墳群が、谷柏地区西方の丘陵中腹には終末期の谷柏古墳群(県指定)が存在し、集落遺跡では萩原遺跡、沢田遺跡、山形元屋敷遺跡などが点在する。

奈良～平安時代の遺跡についても発掘調査が増加しており、谷柏・松原地区を中心に(財)山形県埋蔵文化財センターにより、東北中央自動車道建設・山形ニュータウン建設事業などを事業要因として、石田遺跡・谷柏J遺跡・萩原遺跡・オサヤズ窯跡・小松原窯跡・山形元屋敷遺跡など多数の発掘調査が実施されている。

特に山形市松原地区から上山市久保手地区にかけての地域は、須恵器生産窯の密集地域であり、吉原遺跡群も含め、調査成果の検討により、山形盆地南北の古代の様相や、生産地遺跡と消費地である集落遺跡の関連性等について考察を進めてゆく必要性があろう。

II 遺跡の立地と環境



表2 基本層序

層序	土色	土質	備考
I	10YR6/1	褐色シルト	④ 1~3 cm 大礫わずかに含む。耕作土。
II	2.5Y7/1	灰白色細砂	鉄分が全体にまじる。耕作土。
III	2.5Y6/3	にぶい黄色細砂	しまり弱。粘性弱。礫が40%程度まじる。
IV	7.5Y2/1	黒色シルト	しまり強。粘性強。均質。

表3 周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	年代	その他の時期・備考
1	吉原Ⅱ	集落跡	8C末葉~9C前半	
2	吉原Ⅰ	鬼郎跡	8C後葉~9C初頭	中世・近世
3	吉原Ⅲ	集落跡	8C後半~9C前葉	
4	吉原Ⅳ	鬼郎跡	8C末葉~9C前半	
5	吉原Ⅵ	集落跡	9C前半	近世
6	吉原Ⅶ	集落跡	9C中葉	
7	山形削高板地内	鬼郎跡	9C後半~10C初頭	調文(中期末葉・後期後葉)・弥生(桜井)・古墳(監室)
8	青田	集落跡	奈良・平安	古墳
9	石コロ	散在地	平安	
10	神尾B	散在地	平安	
11	三木本塗	窓跡	9C末葉~10C初頭	
12	神尾C	散在地	平安	
13	神尾D	鬼郎跡	平安	
14	成沢西	集落跡	10C前葉	
15	酉の宮	鬼郎跡	9C中葉	
16	塙幸田A・B	集落跡	9C末葉~9C前半	古墳(南小泉)・宇世
17	館	集落跡・袖船跡	平安	調文(中期中葉)・宇世
18	坊屋敷	鬼郎跡	9C後半~9C前半	調文(中期中葉・後期・晩期)・弥生(桜井)・古墳(塙谷)
19	金池	鬼郎跡	平安	調文(中期中葉・後期前葉・晩期前葉)
20	百目鬼	鬼郎跡	9C後半	近世
21	鏡ヶ削	鬼郎跡	奈良・平安	
22	洛合	集落跡	奈良・平安	古墳
23	前明石	鬼郎跡・古墳	平安	弥生(桜井)・古墳
24	寺裏	集落跡	9C	古墳(塙谷・南小泉II)
25	二位田	鬼郎跡	8C末葉~9C初頭	調文(中期後半)・弥生(桜井)
26	萩原	集落跡	8C中葉~9C前葉	古墳・中世
27	谷拾I	集落跡	平安	調文(後期前葉)・古墳・中世・近世
28	上谷前	鬼郎跡	9C中葉	
29	沢田	鬼郎跡	奈良・平安	弥生(桜井)・古墳
30	沢谷	鬼郎跡	奈良・平安	古墳(塙谷・南小泉II)
31	山形元堀塚	鬼郎跡	平安	古墳(塙谷)
32	石田	鬼郎跡	9C初~中期	調文(中期末葉)
33	高崎	鬼郎跡	奈良	
34	高崎山	鳥居遺跡	平安	
35	古塙山	跡跡	平安	別称「谷拾山跡跡」
36	片岩地	鬼郎跡	平安	
37	横手区	鬼郎跡	奈良・平安	調文(中期中葉)・古墳・中世
38	松原	散在地	平安	
39	オサヤズ監	跡跡・鬼郎跡	8C末葉	調文
40	オミロク火葬場跡	墓	平安	(平成10年度登録抹消)
41	石原坂A	鬼郎跡	平安	調文(平成10年度登録抹消)
42	小松原塙跡群	塙跡	9C前半	調文(早期末)
43	長者原遺跡	鬼跡・鬼郎跡	平安	調文
44	熊野堂	堂跡	平安	別称「ガラミキ」

III 発見された遺構と遺物

1 遺跡の概観

(1) 遺跡の層序

遺跡の層序は3層に区分された。現場段階でI～III層の基本層序を確認した(表2)。I層が表土及び耕作土である。遺構はII～III層にて検出された。II層は火山灰バミス状の堆積物を多く含む黄褐色シルト層であった。II層より下層に確認されるIII層は、黄褐色の非常に粘性が強いシルト層であった。そのため水はけは悪く、調査期間中には度々の降雨や台風による降水のため、作業の中断に悩まされた。

地形は東から西に向かって緩やかに傾斜する。遺構及び遺物の出土状況から、遺跡範囲は調査区の西側には広がらないものと判断された。

(2) 遺構と遺物の分布

今回の調査で確認された遺構は、主に掘立柱建物跡を構成したと考えられる柱穴群である。平安時代前半と判断される時期の遺構と遺物の分布は調査区内東側に集中して検出され、調査区内西側で遺構は検出されず、遺物のみ表土層から検出された。今回の調査区域は、想定される吉原II遺跡の集落全体の位置関係において、北西端の周縁部分にあたるものと推測される。

平成9年度に本市教育委員会が発掘調査を行なった第1次調査区からは、奈良～平安時代初頭の掘立柱建物跡群が確認されている(武田1998・2001)。これら以前の遺構との関連性の把握を目的として、調査は東側に集中した柱穴群や溝跡の精査を中心に行った。事業との兼ね合いにより調査区の制約はあったが、検出された遺構の配置状況は第3図の通りである。

検出された柱穴跡は36基である。他にSK42土坑、SD1・10・11溝跡、SX40性格不明土坑等が確認されており、それらによって本遺跡の遺構内容が構成される。遺構群の年代については、出土遺物の様相からはいずれも9世紀初頭～後半、平安時代前半の範疇におさまるものと判断した。

遺構群の主体となる柱穴群は、調査区の制約もあり、明瞭な建物の構成関係を把握する事ができず、出土遺物の年代からは大幅な時期差は看取できなかった。

検出された遺物については、大勢としては9世紀後半の須恵器が主体を占める。中でも壺等の貯蔵具が数量的に多い。また、いわゆる赤焼土器の壺も一定量確認された。なお、土師器壺等の煮炊具の体部破片も数多く検出されたが、圓化し得なかったものが多い事を付記しておく。

周辺の遺跡群の様相については、吉原II遺跡から県道を挟んで西側には吉原I遺跡・吉原III遺跡が所在する。北側には縄文時代中期の吉原V遺跡が所在する。吉原遺跡群は大規模土地区画整理事業に伴い発掘調査が実施され、奈良時代後半から平安時代前半を中心に、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が検出されている。時期による遺構密度・検出内容の差はあるものの、吉原I・吉原II・吉原III遺跡においては8世紀後半～9世紀初頭の掘立柱建物跡を中心とする遺構群が検出されている。

2 検出された遺構と遺物

吉原II遺跡の調査で検出された遺構は、II～III層(表2)にて確認された。遺物は大半がSD10溝跡からの出土であり、全体で整理箱にして8箱出土した。以下、その概要を略述する。

なお、調査区の制約から、図版および本文の記載については、便宜的に近接して検出されたTPごとでまとめている。建物跡を構成する要素の関連性でまとめたものではない。

(1) 柱穴跡 (第4~9図 図版1~3)

柱穴跡として確認されたものは36基である。これらは検出状況や出土遺物から判断して、全て9世紀初頭～後半の時期に帰属する遺構と考えられる。平面プラン検出時の状況や断面の土層観察から、重複や切り合いが認められるものもあり、新旧関係は以下の通りであった。同一建物を構成すると考えられる類似性は複数箇所で認められたが、調査区の制約もあり、積極的に建物を構成し得るだけの関連性を見出すことができなかった。以下、検出した遺構について概略を述べる。

SP13・14・15・16・17・18・19・20・21・25・26・27・29・31・32・33・34・35・36・41・43 (第4~5図 図版1~4)

(位置) SP14・15・16・31・32・34・35・36 (TP3) ・ SP43・41 (TP18) ・ SP18 (TP22) ・ SP19・20 (TP23) ・

SP29 (TP24) ・ SP17・27 (TP25) ・ SP13 (TP26)

(規模) 平面形態は円形や長径円形、隅丸方形を呈する。SP14・15・16・31・32・34・35・41は同一線上の並びにあり、柱穴の規模も長軸60~90cm、深さ20~40cm前後と類似するため同一建物の構成要素と考えられるが、建替えが頻繁に行われたためか、柱穴同士の切り合い・抜き取りが激しく、柱の並びとしての規則性を見出せなかった。

(出土遺物) S P36掘り方覆土より須恵器有台坏 (36-1) が出土した。

(年代) 出土遺物より、9世紀初頭～後半の時期と考えられる。

SP5・23・24・30 (第6図 図版2)

(位置) S P23・24 (TP31) ・ S P30 (TP32) ・ S P5 (TP34) に位置する。

(規模) 平面形態は円形や方形を呈する。S P5は長軸24cm、深さ16cmと小規模である。S P23はS P24を切っており、平面形態はいずれも方形を呈する。S P23は長軸で88cm、S P30は長軸で96cmであり、同等の規模を呈するため、同一建物の構成要素であった可能性が強い。またS P23・24には建替えのあった可能性が認められる。

(出土遺物) S P30掘り方覆土より須恵器坏 (30-1) が出土した。

(年代) S P30については、出土遺物より、9世紀代と考えられる。その他の柱穴跡もおおむね同じ時期と考えられる。

SP2・6・37・38・39 (第7図 図版1・2)

(位置) S P2 (TP49) ・ S P6 (TP39) ・ S P37・38 (TP42) ・ S P39 (TP41) に位置する。

(規模) 平面形態は円形や方形を呈する。S P2は長軸48cm、S P6は長軸56cmで平面円形を呈する。S P37・39は各々長軸が84・92cmと大きく、平面方形を呈する。深さも60cm前後と深く、同一建物の構成要素であった可能性が強い。S P38はS P39の抜取穴と考えられる。

(出土遺物) S P39掘り方覆土より須恵器坏 (39-1) ・ 麦か鍋 (39-2) が出土している。

(年代) S P2がSD1に切られる。出土遺物より9世紀後半と考えられる。

SP4・7・8・9 (第8図 図版2)

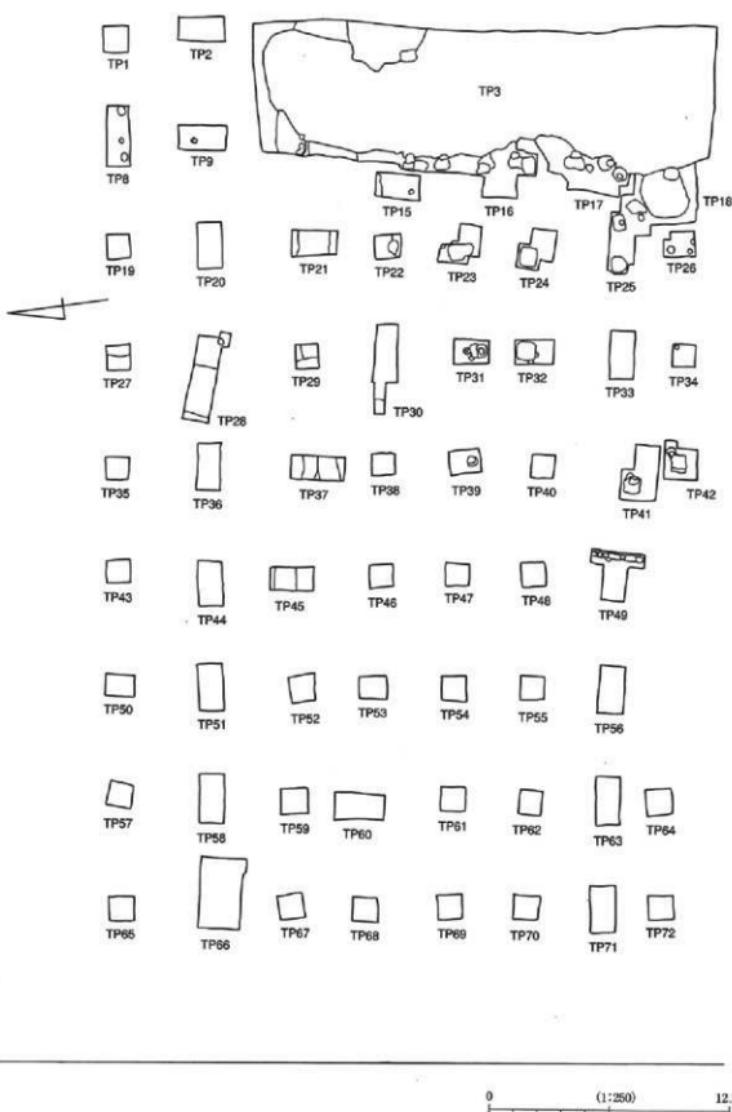
(位置) TP8~9に位置する。

(規模) いずれも平面形は円形を呈する。直径30cm程度の小規模なものばかりであり、深さも40cm程度のものが多い。柱筋の並びも判然としなかった。II層地山で確認されるものが多い。

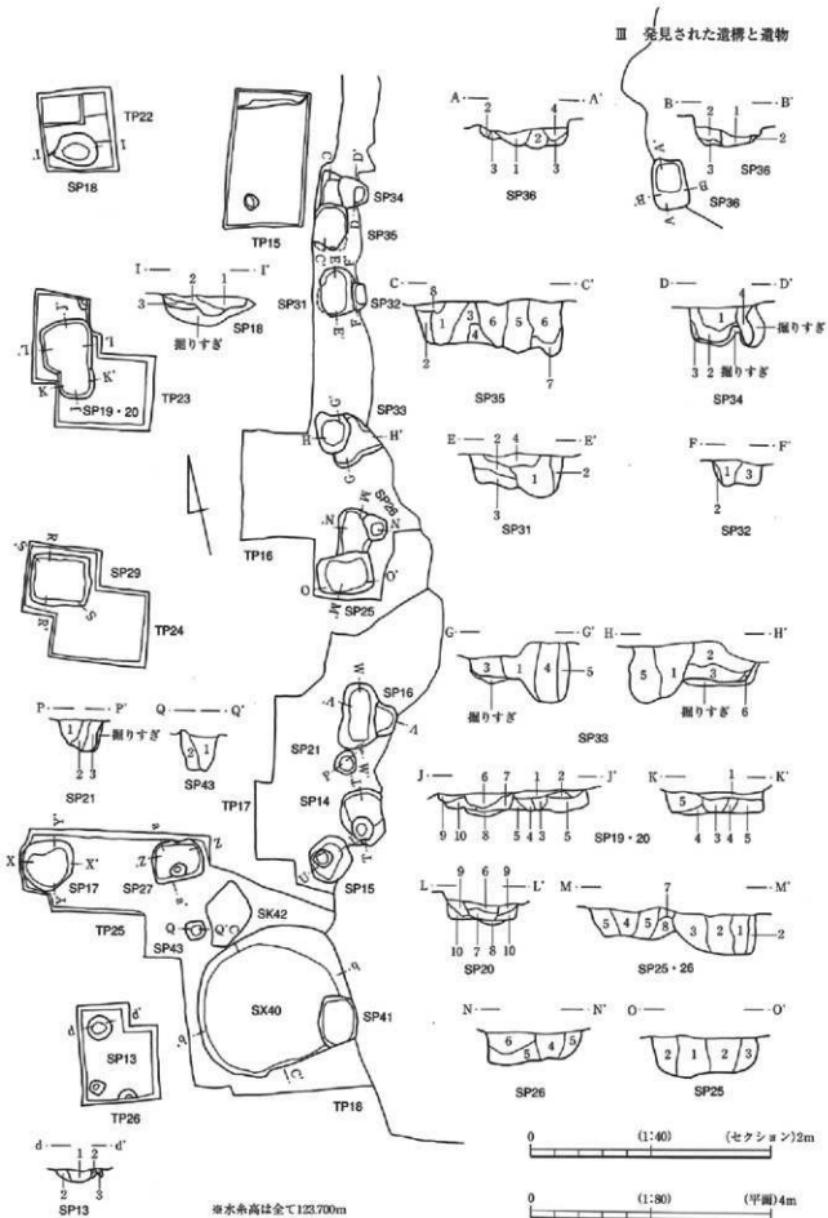
(出土遺物) いずれの柱穴覆土からも遺物は出土していない。

(年代) 遺物は検出されないが、他の柱穴群と覆土の土色は類似しており、時期は9世紀後半と考えられる。

III 発見された遺構と遺物

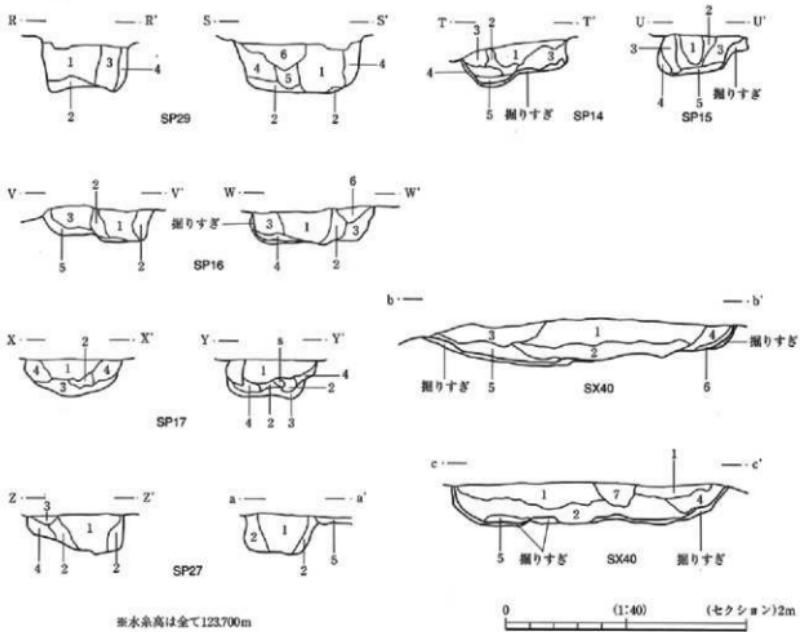


第3図 調査地点配置図

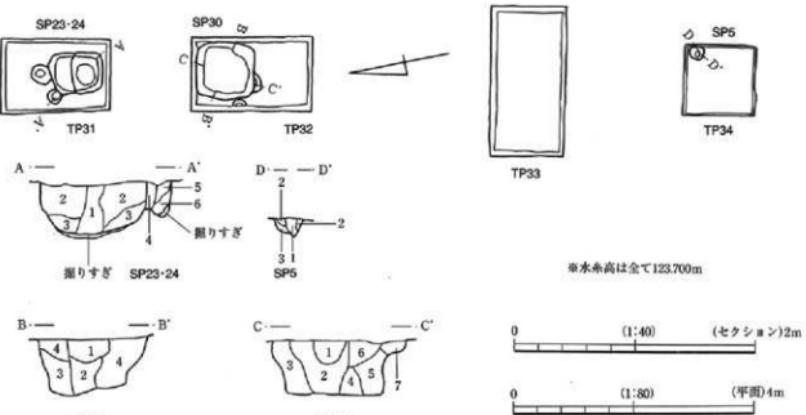


第4図 TP3・15~18・22~26平面図・セクション(1)

III 発見された遺構と遺物

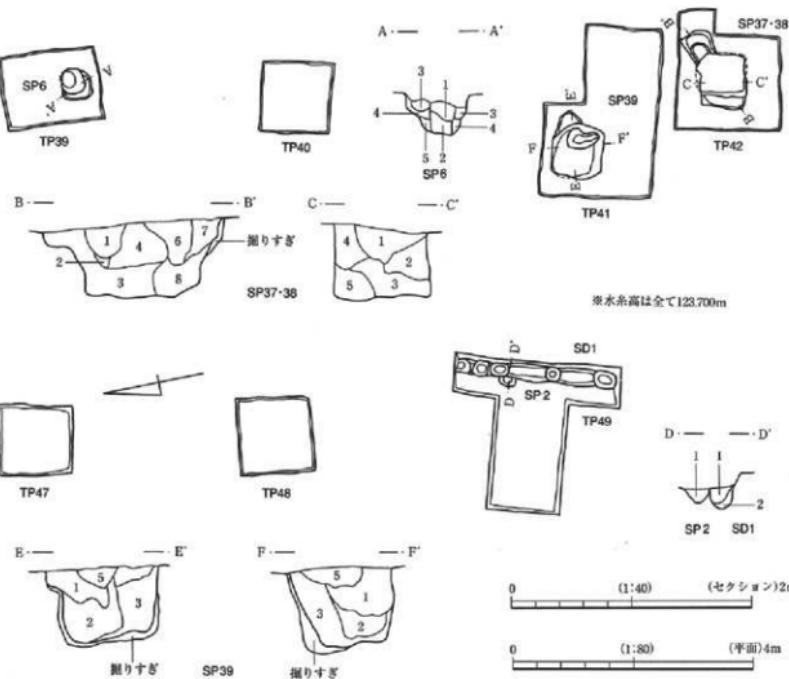


第5図 TP3-15~18・22~26平面図・セクション(2)

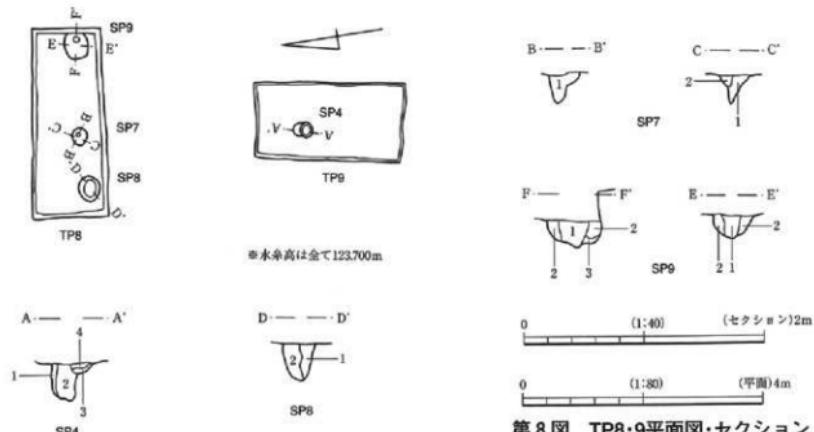


第6図 TP31~34平面図・セクション

III 発見された遺構と遺物

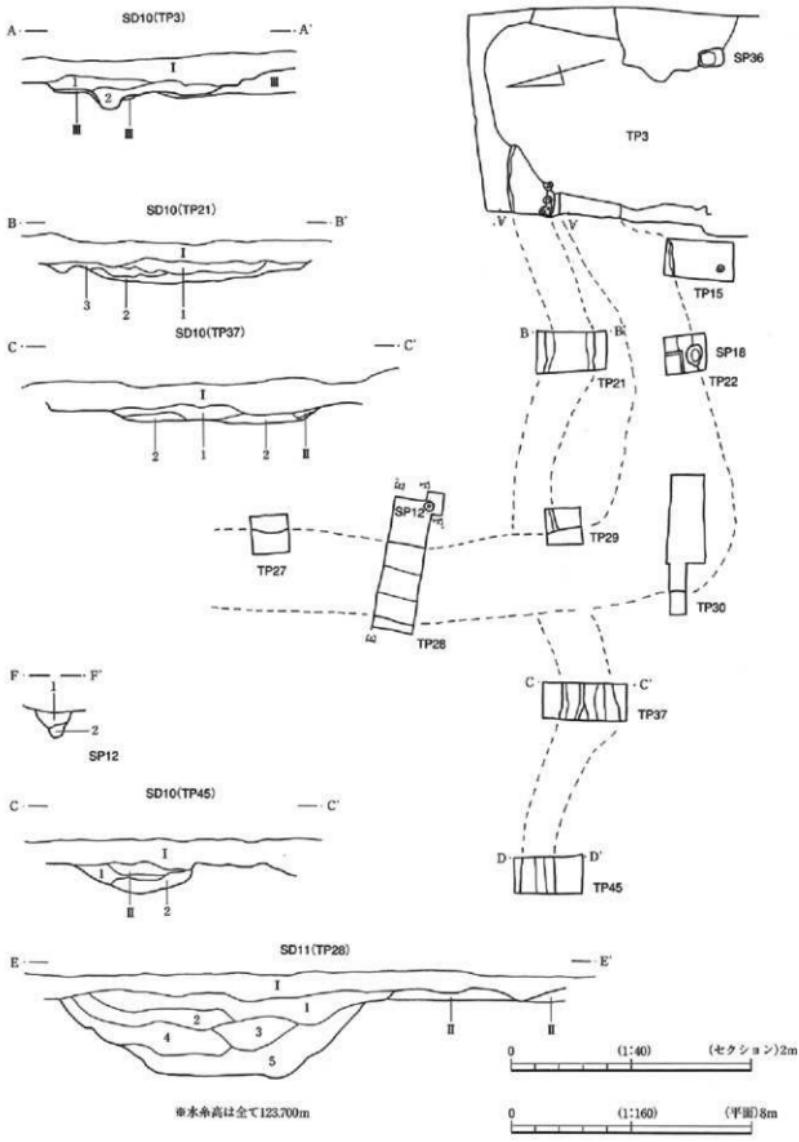


第7図 TP39~42・47~49平面図・セクション



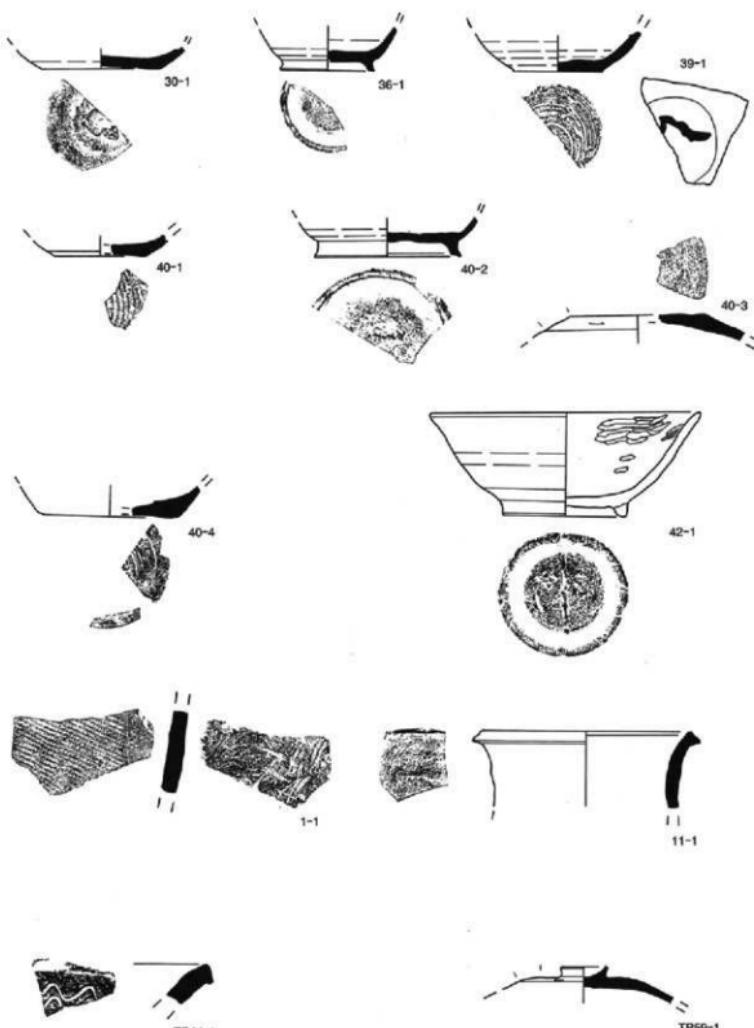
第8図 TP8・9平面図・セクション

III 発見された遺構と遺物



第9図 SD10・SD11平面図・セクション

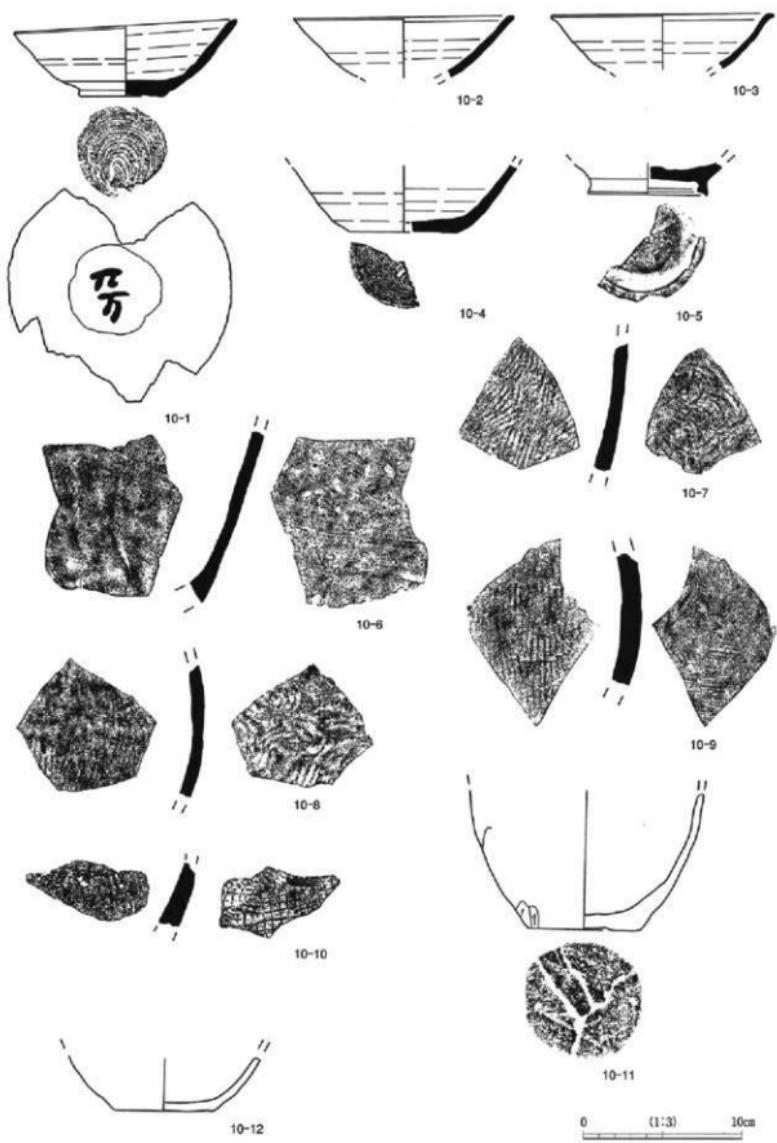
III 発見された遺構と遺物



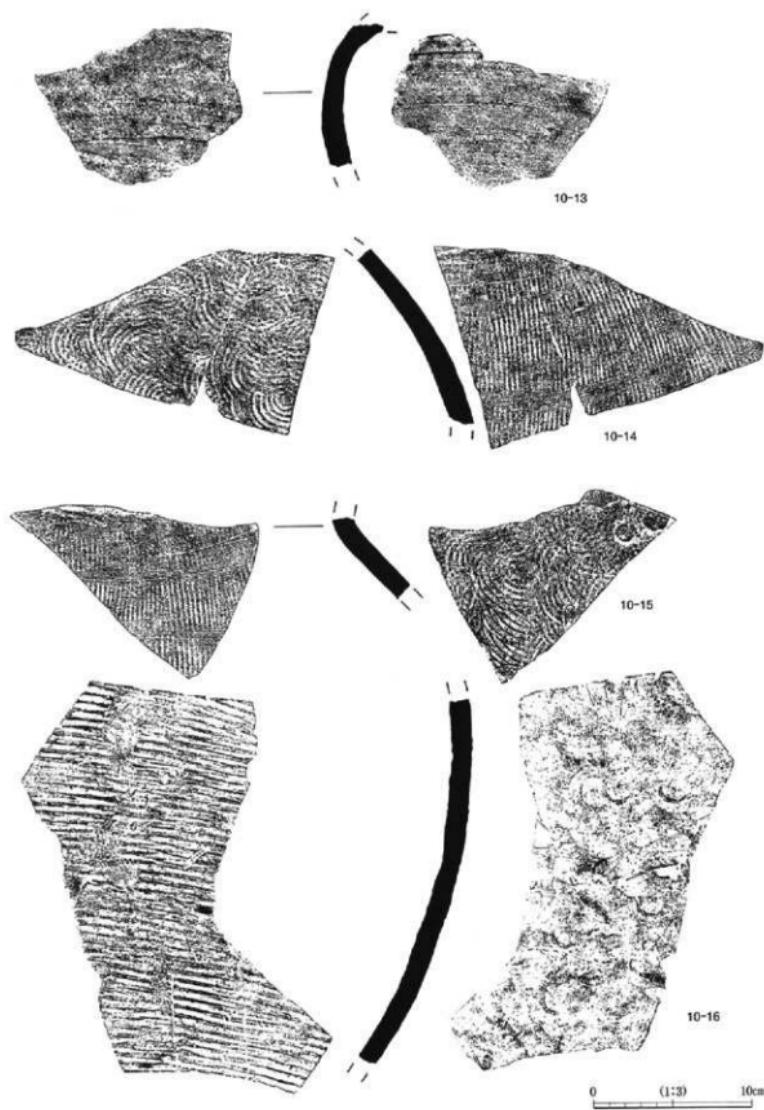
0 (1:3) 10cm

第10図 SP-SK-SD-SX-TP出土遺物

III 発見された遺構と遺物

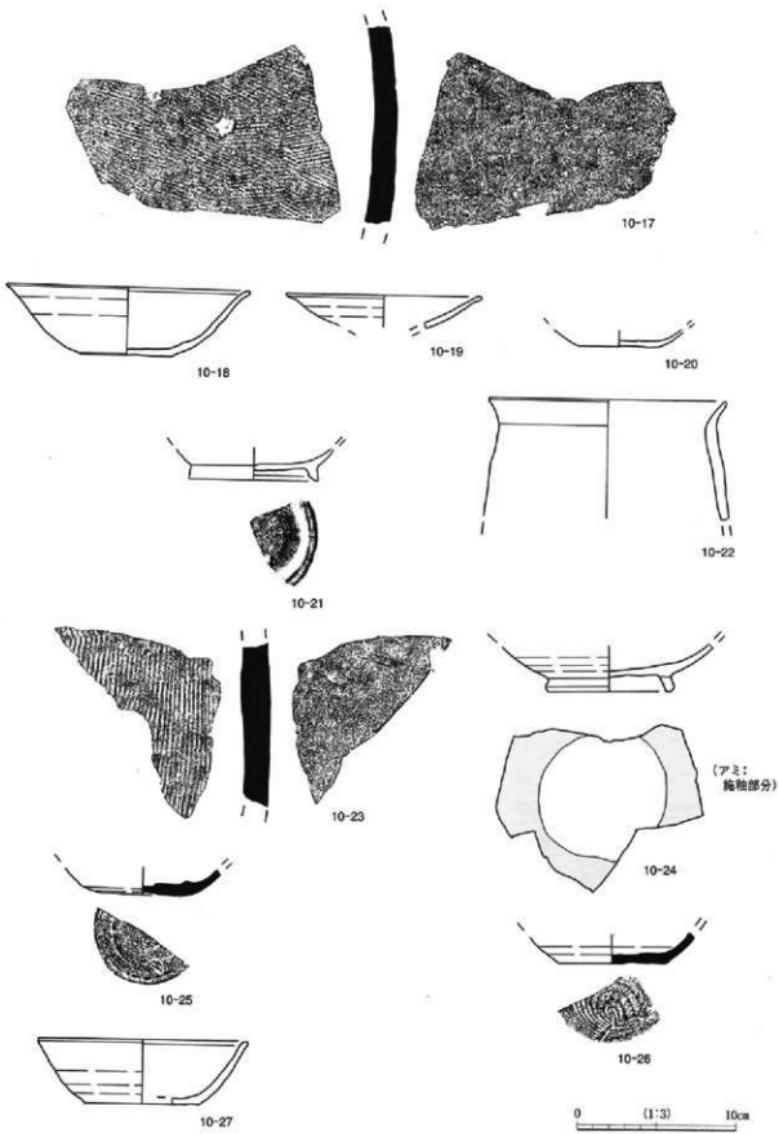


第11図 SD10(2層)出土遺物



第12図 SD10(1層)出土遺物(1)

III 発見された遺構と遺物



第13図 SD10(1層)出土遺物(2)

S P 12 (第9図)

(位置) T P 28に位置する。

(規模) 平面形は円形、直径32cmであり、深さも20cmと浅い。他の柱穴群との関連も不明である。

(出土遺物) 遺物は出土しなかった。

(年代) 遺物は検出されていないが、他の柱穴群と覆土の土色は類似しており、時期は9世紀後半と考えられる。

(2) 土坑・性格不明土坑

S K 42 (第4図 図版4)

(位置) T P 18に位置する。

(規模) 平面形状は不整形を呈し、規模は長軸約140cm、短軸84cmを測る。深さは非常に浅く、「はまり」のような堆積であったと考えられる。

(出土遺物) 遺物は土師器有台坏(43-1)が出土した。内面に黒色処理が施される。

(年代) 遺物から9世紀中葉～後葉の時期と考えられるが、周囲の遺構群との詳細な新旧関係については不明である。

S X 40 (第4～5図 図版4)

(位置) T P 18に位置する。

(規模) 平面形状は円形を呈し、規模は長軸約260cm、短軸220cm、深さ約35cmを測る。形状としては鉢形の土坑であった。SP41柱穴を切って作られた遺構である。遺物の出土は第1～2層(第5図)からのみであり、出土遺物の年代が遺構の年代を示すものかどうかは不明である。土坑そのものの性格の詳細については判然としなかった。

(出土遺物) 遺物は須恵器坏(40-1)・有台坏(40-2)・壺(40-3)・壺(40-4)が出土した。

(年代) 遺物から9世紀中葉～後葉の所産と考えられる。S P 41を切る。

(3) 溝跡

S D 10 (第9図 図版4～5)

(位置・方向) 東から西に流れ、TP3・21・29・37・45に位置する。TP37で2本に分かれる様相であるが、TP45では1本の流路しか確認できず、それより西側に流路は確認されなかった。

(規模) 幅100～220cm、深さ14cm～26cmを測る。

(年代) 1層と2層の出土遺物を層位で取り上げ、分類して図化し掲載した(第11～13図)。層位関係は1層が2層よりも上層で新しい。セクション図(第9図)の層位番号と対応させている。出土遺物の様相から、2層の須恵器は回転糸切・底部無調整の坏(10-1～4)が出土しており、体部の形態も類似したプロボーションにまとまる。壺も外面平行タタキ・内面同心円圧痕のもの(10-8～10)が大勢を占める。1層は「あかやき土器」の坏・有台坏(10-18～21)が混入する。灰釉陶器碗(10-24)も確認される。

S D 11 (第9図 図版5)

(位置・方向) 調査区中央を東から流れ、TP30付近において北に向かって折れ曲がる様相である。TP3・15・22・27・28・29・30にて確認された。

(規模) 幅280cm、深さ100cmを測る(TP28)。東～北西に走る。確認されたいずれの地点においても深さは100cm前後と深い。全体の様相については把握できなかった。

III 発見された遺構と遺物

(年代) 出土遺物は須恵器壺口縁(11-1)のみ図化して掲載した。遺構の切り合いで、SD 10を切っている(TP 29)。覆土の土色は茶褐色で粘性が強く、周辺の古代の遺構群より新しい様相が窺えた。出土遺物に近世陶器等が含まれ、近世以降の所産であると推定されるが、詳細な埋没年代については不明である。遺物の年代観や土質から鑑みて、新しい時期まで使用されていたものと考えられる。

SD 1 (第7図 図版5)

(位置・方向) 南北に流れ、TP 49に位置する。調査区南側に向かって流れる様相であった。

(規模) 幅約30cm、深さ約40cmを測る。溝底部にピットが連なって検出される様相であり、横列のような様相かとも窺えたが、判然としない。

(年代) 遺物は須恵器壺(1-1)が出土している。周辺との様相より9世紀代後半の時期と考えられる。SP 2を切る。

(4) 表土層出土遺物 (第10図 図版6~7)

表土層や確認面より土師器・須恵器・近世陶器が出土した。図化可能なものについて一部掲載した。須恵器は壺・有台壺・壺(TP 44-1)・蓋(TP 59-1)、土師器は壺・近世陶器は擂鉢などが出土している。

3 総括

(1) 調査の成果

吉原II遺跡は、山形市域西部を流れる須川右岸の微高地上に立地する奈良～平安時代の集落跡である。今回の調査は店舗建設工事を原因とする緊急発掘調査で、事業実施範囲内の建物建設予定範囲を対象にしたものである。

今回の調査の意義として、官衙的施設である可能性が示唆された吉原II遺跡について、発掘調査の実施により従来の成果に加えて遺跡の様相を明らかにできた事が挙げられよう。

以下、本調査区にて検出された遺構・遺物をもとに、考察を加えて調査のまとめをしたい。

(2) 平安時代の遺構及び遺物について

検出された遺構は、柱穴36基、溝跡3条、土坑1基、性格不明土坑1基であった。時期は平安時代前半(9世紀後半)のものがほとんどである。以下、検出された遺構群について考察を加える。

遺構の変遷及び性格について

まず柱穴群について述べる。概説的には平面規模において長軸1m以上で平面方形のもの(S P 39-40他)、長軸80~60cm程度のもの、長軸50cm以下のもの(S P 2・5・13他)と、大きく3つの規模に分類できる。TP 3の西側には密集して柱穴が確認され、複数期の建替・変遷が看取でき、同一の建物跡を構成すると考えられたが、調査区の制約もあり、柱穴の配置等で明確な関連性を見出せなかった。

次に溝跡について述べる。柱穴群と同時期の9世紀代後半に属するものがSD 10・1の2条、SD 11は土色・出土遺物より、近世以降の所産と考えられる。特にSD 10からは、精査面積に比べて、多量の遺物が出土している。出土遺物については、覆土の層位からは時期差は判別されなかった(第11~13図)が、上層である1層は須恵器貯蔵具がその大勢を占め、下層である2層では須恵器・土師器とも壺・有台壺の供膳具が大勢を占める、という相違点が窺えた。中でも1層より灰釉陶器碗(K-90段階併行か)(10-24)が出土している事は特筆できよう。時期的にも、1層からは須恵器壺が出土しておらず、現状では明瞭な年代観が判断できないが、2層出土遺物の須恵器の年代観よりやや下る、ないしは同時期の

ものと判断される。

土坑 S K42・S X40はTP18にて検出された。S X40はS P41を切っており、柱穴群よりもやや新しい時期の印象を持つが、定かでない。

出土遺物について

本調査で出土した遺物はコンテナ8箱を数える。その内39点について図化し得た。出土遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器等土器類が最も多く、中でも供膳形態の壺、貯蔵形態の甕・壺等が主体である。先に年代観を述べると、主体の遺物群は、9世紀後半の年代が壺や有台壺の形態から推定される。

本書中では出土遺物の種別についてI—須恵器、II—土師器、III—施釉陶器の3種に大別した。器種は、A—壺、B—有台壺、C—蓋、G—壺、H—甕、I—碗、J—擂鉢に分類し、器形や調整技法の特徴により細分した。須恵器・土師器共に完形に近い物が少なく、遺物様相の傾向を判断するに困難な状況であり、貯蔵具や煮炊具などは出土部位の様相で分類するにとどめた。底部痕跡についてはa—窓切、b—回転糸切、c—葉脈痕、d—ナデ調整のため不明、の4類に分類している。本書中の遺物の分類については表5の通りである。

須恵器から様相を略述する。出土した器種は供膳形態が少なく、比較して貯蔵形態の出土量が多い。壺については、底部切離し痕跡では回転窓切が僅かであり、回転糸切、あるいは切り離しの後底面ナデ調整を行ったものが大半を占める。胎土には凝灰岩粗砂が混入するものが多く見られた。貯蔵形態の甕や壺は部分でしか出土せず、個体の様相が識別し得るものは皆無であった。体部・肩部片については、表裏の調整によって分類を試みた。

また、須恵器にのみ墨書き器が確認されている。壺(10-1・39-1)の2点である。いずれも墨痕が著しく摩滅していたが、赤外線カメラを利用して識別した結果、10-1については「廿万」ではないかと識別できたが、39-1の字体については不明であった。赤外線カメラの使用は(財)山形県埋蔵文化財センターの御協力を、字体の識別は東北芸術工科大学 村木志伸氏からの御教示を得た。

土師器で出土した器種については甕の底部や体部など、煮炊形態の甕が大半であった。大半の遺物の遺存状態は悪く、完形に近い形となるものは皆無であり、部位ごとの特徴による分類のみにとどめた。赤焼土器も土師器の範疇に含めて分類した。出土器種は壺のみである。

施釉陶器は古代灰釉陶器碗(10-24)・近世陶器擂鉢が出土している。特にS D10-1層出土の10-24は9世紀後半～末葉の年代観が考えられる(齊藤1994・2000)。2層出土の須恵器壺(10-1・2・3・4)などの年代観とは併行か、若干下るものと考えられる。庄内地方に比べて、村山地方での灰釉陶器の出土事例は少ないが、調査件数に比して増加している。今後も在地の土器群と編年を対比させながら、年代観の確定に向けた作業が必要となろう。

まとめ

結果として、第1次調査の遺構群との関連性を確認することは困難であった。掘立柱建物跡が遺構群の主体を成す様相は同様であるが、遺物の年代は第1次調査区よりも新しい様相を呈し、9世紀後半の遺構群と考えられる。調査区の制約もあり、建物跡を構成するに至らなかったことは先に述べた。吉原Ⅱ遺跡も含め、今後の整理作業の実施を通して、官衙的様相を持つとされる吉原遺跡群の性格について明らかにしてゆく必要があろう。

III 発見された遺構と遺物

表 5 遺物分類表

土器区分	器種	器種分類	口縁部へ体部形態	外縁調整	内面調整	底面形状
瓦窯器 I	壺 A	1	器高が高く、体部が直線に立ち上がる	ロクロ	ロクロ	a b
		2	器高が高く、ロクロ目が顯著に残り口縁部が外反する	ロクロ	ロクロ	a b
	有台壺 B		高台が外側端部で縫地する 付高台	ロクロ	ロクロ	b d
		1	天井部が平坦で、体部との境が明瞭	ロクロ ケズリ ナデ	ロクロ	
	蓋 C	2	天井部が丸みを持ち、体部との境が不明瞭	ロクロ ケズリ	ロクロ	
		1	底部平滑のもの	ロクロ ケズリ	ロクロ	d
	蓋 G	2	小型で、底部に台のつくるもの	ロクロ	ロクロ	b
		1	口縁部器厚が1.2cm前後	ロクロ	ロクロ	
	甕 H	2	口縁部器厚が0.7cm前後	ロクロ	ロクロ	
		3	肩部で、平行タキナキ目が窓がある	ロクロ タタキ カキメ	ロクロ	
		4	体部で、外面平行タキナキ・内面同心円アテ底	ロクロ タタキ	同心円アテ	
		5	体部で、外面平行タキナキ・押えタケ底	ロクロ タタキ	アテ底	
		6	体部で、外面平行タキナキ・内面浮子状アテ底	ロクロ タタキ	浮子状アテ底	
		7	体部で、外面平行タキナキ・内面カケメ状調整窓	ロクロ タタキ	アテ底	
		1	ロクロ底部（あかやき土器）で内面黑色処理	ロクロ	ロクロ	b c
土師器 II	壺 A	2	ロクロ底部（あかやき土器）	ロクロ	ロクロ	b c
		1	ロクロ底部（あかやき土器）とは異なる純成	ロクロ	ミガキ	d
	有台壺 B	2	画面黑色処理	ロクロ	不明	d
		1	平底で器高が直線に立ち上がる	ハケメ ケズリ	ハケメ	c
施釉陶器 III	甕 I	2	小型で器高が低く、内面黑色処理を施すもの	ナデ ハケメ	ミガキ	
		3	器形が薄く、口縁部と体部の境がくの字状に屈曲するもの	ナデ	ロクロ	
	瓶鉢 J		古代の灰陶陶器箇錠を一括	ケズリ	ケズリ	d
			近世陶器標本を一括	ロクロ	ロクロ	b

表 6 遺構観察表

遺構記号	遺構番号	所在TP	平面形態	身幅	底幅	深さ	備考	詳細	図版
S.P.	2	49	円形	65	44	16	S.D.Iに切られる	9	8
S.P.	4	9	円形	24	29	28		8	-
S.P.	5	34	円形	24	29	16		6	-
S.P.	6	29	円形	56	48	24		7	4
S.P.	7	5	円形	29	21	21		8	-
S.P.	8	8	円形	44	32	30		8	-
S.P.	9	8	円形	(60)	49	20		8	-
S.P.	12	28	円形	25	20	22		9	-
S.P.	13	26	円形	60	49	16	埴土多量に含む	4	2
S.P.	14	17	不規円形	63	78	41		4	2
S.P.	15	17	不規円形	64	68	36		4	2
S.P.	16	17	不規円形	168	56	26	底側に抜き倒しているか?	4	-
S.P.	17	89	不規方形	84	80	26		4	4
S.P.	18	22	青釉円形	72	42	24		4	-
S.P.	19	22	方形容	65(4)	58	20	19B#20を切る	4	1
S.P.	20	23	方形容	66	(52)	18	19B#20を切る	4	1
S.P.	21	17	円形	46	36	26		4	-
S.P.	23	21	方形容	68	64	42	23B#21を切る	6	2
S.P.	24	21	方形容	36	(20)	28	23B#24を切る	6	2
S.P.	25	16	方形容	92	84	32	23B#26を切る	4	1
S.P.	26	16	不規円形	(74)	(30)	18		4	1
S.P.	27	18	方形容	84	64	32		4	-
S.P.	29	24	方形容	104	84	40		4	2
S.P.	30	32	方形容	96	92	49		4	-
S.P.	21	3	不規円形	(44)	(32)	25	9B#32を切る	4	3
S.P.	22	3	不規円形	76	(60)	36	9B#31に切られる	4	-
S.P.	33	3	不規円形	64	(60)	50	南に復か削しているか?	4	3
S.P.	34	3	不規円形	82	48	30	34B#30を切る	4	-
S.P.	35	3	方形容	72	56	45	34B#35を切る	4	-
S.P.	36	3	方形容	84	60	48		4	1
S.P.	37	42	方形容	84	78	54	37#38#42を切る	7	3
S.P.	38	42	不規形	—	—	—	抜き取り穴か?	7	3
S.P.	39	42	方形容	92	84	66		7	2 3
S.P.	41	18	方形容	60	64	—	9X#40に切られる	4	-
S.P.	43	18	円形	36	32	35		4	-
S.K.	42	18	不規形	108	72	—		4	4
S.D.	1	49						7	5
S.D.	18	21 29 27 45						9	4 5
S.D.	11	3 15 22 30						9	5
S.I.	40	18	円形	260	220	34		4	3

III 発見された造橋と遺物

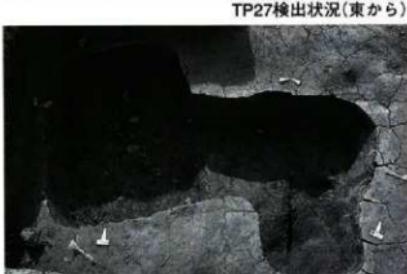
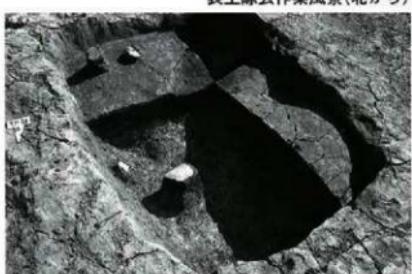
表7 遺物観察表

遺物番号	TF	遺物名	器種	器形	施用部位	分類	口径	底径	深さ	厚さ	外面	内面	出土品人物	備考	種別	回数		
1-1	16	S81	1層	直底盤	張	直底	184			0.9	平行タクシ ヘアメ					19	8	
11-3	28	S811	1層	直底盤	張	口縁部	182	12.5		0.8	ヘアナゲ	ロクロ	粗研合む			19	7	
20-1	32	S P30	小口方	直底盤	坪	直底	13m	7.4	0.5	0.2	ロクロ	ロクロ	粗研合む			19	7	
26-1	3	S P26	2層	直底盤	有台坪	直底	122b	5.8	0.4	ロクロ	ロクロ					19	7	
39-1	41	S P29	ボリ方	直底盤	坪	直底	14b	8.4	0.5	ロクロ	ロクロ	粗研多く含む	画面粗面直		19	7		
40-1	18	S340		直底盤	坪	直底	14b	8.6	0.6	ロクロ	ロクロ	粗研含む			19	7		
40-2	13	S X40		直底盤	有台坪	直底	18d	9	0.3	ロクロ	ロクロ		セビア色		19	7		
49-3	18	S X40		直底盤	蓋	天井部	1C1	8.4	0.7	ケブリ	ロクロ		粗研多く含む		19	7		
55-8	16	S340		直底盤	蓋	直底	161d	8.2	0.8	瓶底立ち上 カラケヅリ	ロクロ					19	7	
42-1	16	S N42		土押盤	有台坪	全体	II14d	16.4	7.6	0.3	ロクロ	セガサ	粗研含む			19	7	
TP44-1	44		2層	直底盤	坪	口縁部	1H1		1.1	ロクロ	ロクロ		画面粗面底状 況		19	7		
TP59-1	19		1層	直底盤	蓋	天井部	1C2	7.2	0.4	ロクロ	ケ ヌギ	ロクロ	画面粗骨合む		19	7		
10-1	21	S D10	2層	直底盤	坪	全体	1A1b	13.2	5.2	4.4	0.6	ロクロ	ロクロ	画面粗骨「甘 足」力		13	6	
10-2	21	S D10	2層	直底盤	坪	全体~口縁部	1A1	13.4		0.4	ロクロ	ロクロ				13	6	
10-3	3	S D10	2層	直底盤	坪	体~口縫部	1A2	15.6		0.5	ロクロ	ロクロ				13	6	
10-4	3	S D10	2層	直底盤	坪	底~全体部	1A3	6.6		0.5	ロクロ	ロクロ	粗研含む			13	6	
10-5	23	S D10	2層	直底盤	坪	有台坪	1B4	7.4		0.7	ロクロ	ロクロ	粗研含む			13	7	
10-6	3	S D10	2層	直底盤	蓋	全体下平	1G			0.7	ケブリ	ケブリ	粗研含む			13	6	
10-7	3	S D10	2層	直底盤	蓋	全体	1B4			0.8	平行タクシ ヘアメ	ロクロ	圓心円柱直 立			13	6	
10-8	3	S D10	2層	直底盤	蓋	全体下平	1H4			0.7	平行タクシ	四心円柱直 立	外圧自然縮			13	6	
10-9	3	S D10	2層	直底盤	蓋	全体	1H5			1.2	平行タクシ ヘアメ	四心円柱直 立	外圧自然縮			13	6	
10-10	5	S D10	2層	直底盤	蓋	全体下平下平	1H6			0.6	平行タクシ ヘアメ	四心円柱直 立	外圧自然縮			13	6	
10-11	5	S D10	2層	直底盤	蓋	上部	II H5c			0.4	ケブリ	ケブリ				13	6	
10-12	3	S D10	2層	直底盤	蓋	底~全体部	II A1	6.2		0.5				内圧土壓縮		13	6	
10-13	23	S D10	1層	直底盤	蓋	直底	1H1			1.5	ロクロ	ロクロ	粗研含む			13	6	
10-14	21	S D10	1層	直底盤	蓋	直底	1H2			1.2	平行タクシ ヘアメ	四心円柱直 立	外圧自然縮			13	7	
10-15	3	S D10	1層	直底盤	蓋	直底	1H3			1.3	平行タクシ ヘアメ	四心円柱直 立	ID-14と同一 個体か?			13	7	
10-16	1010		1層	直底盤	蓋	全体下平	1H4			1.4	平行タクシ	四心円柱直 立				13	7	
10-17	5	S D10	1層	直底盤	蓋	全体	1H5			1.5	平行タクシ	四心円柱直 立	外圧自然縮			13	7	
10-18	3	S D10	1層	直底盤	坪	全体	II A2	14.8	5.6	4.2	0.4	ロクロ	ロクロ	非燃土器 非 熱帯しい		13	6	
10-19	21	S D10	1層	直底盤	坪	全体	II A3	12		0.4	ロクロ	ロクロ	非燃土器 非 熱帯しい			13	6	
10-20	21	S D10	1層	直底盤	坪	底部	II A2g			0.3	ロクロ	ロクロ	非燃にものい			13	7	
10-21	21	S D10	1層	直底盤	坪	全体	II B2	8		0.4						13	7	
10-22	3	S D10	1層	直底盤	坪	底部	II C2	14.4		0.7	不規則	ケブリ				13	6	
10-23	21	S D10	1層	直底盤	坪	底部~全体	II E1	7.6		0.5	ロクロ	ロクロ	野間毛化り			13	6	
10-24	21	S D10	1層	直底盤	坪	底部	II F1	5		0.5	ロクロ	ロクロ	粗研含む			13	7	
10-25	45	S D3	2層	直底盤	坪	底部	II A1	6.4		0.6	ロクロ	ロクロ	粗研含む			13	7	
10-26	45	S D3	2層	直底盤	坪	底部	II B1	6.4		0.6	ロクロ	ロクロ	粗研含む			13	7	
10-27	29	S D6	1層	土押盤	坪	底~口縁部	II A1	13	7	4	0.5	ロクロ	セガサ	不明			13	6

(参考文献)

- 阿部明彦・木戸弘美 1999 「山形県の古代土器編年」「第25回 古代城柵官衙遺跡検討会資料」 古代城柵官衙遺跡検討会
 茨木光裕 1998 「遺跡分布から見た古代交通路の復元の一考察—鞍山郡南半部を中心として—」「さあべい」第15号 さあべい同人会
 國井修 2002 「吉原遺跡と住宅地団地造成工事に伴う発掘調査報告書」 山形市埋蔵文化財調査報告書第13集
 斎藤孝正 1994 「東海地方の施動陶器生産」「古代の土器研究—律令の土器模式の西・東3 施動陶器—」 古代の土器研究会
 斎藤孝正 1996 「黒底90号式」「美濃の灰釉陶器」「日本土器考古」 雄山館
 斎藤孝正 2000 「越州窯青磁と緑磁・灰釉陶器」「日本の美術429」 至文堂
 鈴木良仁・須賀井明子 1996 「富山2遺跡発掘調査報告書」 山形市埋蔵文化財センター調査報告書第41集
 須賀井美之・國井修 2002 「石田遺跡 上谷寺遺跡発掘調査報告書」 山形市埋蔵文化財調査報告書第14集
 武田和宏 1998 「吉原II遺跡」「第24回 古代城柵官衙遺跡検討会資料」 古代城柵官衙遺跡検討会
 武田和宏 2001 「吉原II遺跡」「山形市埋蔵文化財発掘調査年報 - 平成5~11年度 -」 山形市教育委員会

図 版



図版 2



TP17検出状況(北から)



SP29検出状況(南から)



SP23・24検出状況(北から)



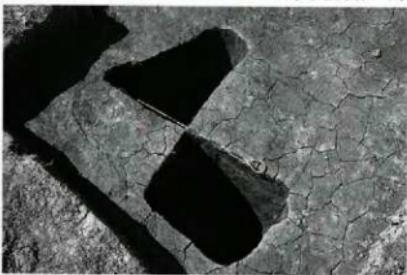
SP9セクション(西から)



台風による浸水状況(東から)



排水作業状況(北から)



SP39セクション(南から)



SP29完掘状況(西から)



SP33完掘状況(東から)



SP31セクション(西から)



SP13セクション(南から)



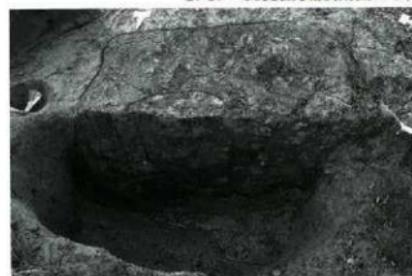
SP39完掘状況(北から)



SP37・38完掘状況(南西から)



SP37・38完掘状況(南西から)



SP15セクション(南東から)



SP14セクション(東から)

図版 4



SP17セクション(西から)



SP6セクション(東から)



TP3・18完掘状況(南から)



SK42検出状況(南から)



SX40検出状況(南西から)



SX40完掘状況(北から)



SD10(TP21)セクション(西から)



TP21完掘状況(南西から)



SD10(TP37)セクション(西から)



SD10(TP45)セクション(西から)



SD10(TP3)遺物出土状況(東から)



SD10・11(TP29)完掘状況(南から)



SD11(TP28)セクション(南から)



TP28完掘状況(西から)



SD1・SP2完掘状況(南から)



調査区全景(東から)

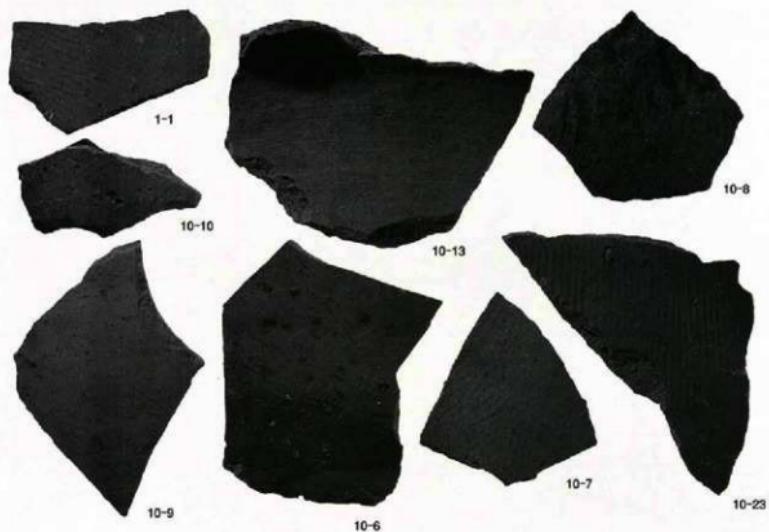
図版 6



図版 7



図版 8



報告書抄録

ふりがな 書名	よしはらにいせきだいさんじはくつちょうさほうこくしょ 吉原Ⅱ遺跡第3次発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	山形県山形市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第16集							
編著者名	須藤英之							
編集機関	山形市教育委員会							
所在地	〒990-8540 山形県山形市旅篭町二丁目3番25号 TEL.023-641-1212							
発行年月日	2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
吉原Ⅱ	山形県 山形市 大字 三つ江	市町村 6201	平成8年 度登録	38度 13分 37秒	140度 18分 50秒	20020627 ～ 20020731	184m ²	店舗建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
吉原Ⅱ	集落跡	平安時代	柱穴36基 溝跡3条 土坑1基 性格不明遺構 1基	土師器（壺・有 台壺・甕） 須恵器（壺・有 台壺・蓋・甕・ 壺） 灰釉陶器（碗）				
					総出土箱数8箱			

山形県山形市埋蔵文化財調査報告書第16集

吉原Ⅱ遺跡第3次発掘調査報告書

2003年3月31日 発行

発行 株式会社ニラク

〒963-8811 福島県郡山市駅前二丁目2番2号

朝日生命郡山センタービル4階 電話 024-927-7111

山形市教育委員会

〒990-8540 山形県山形市旅篭町二丁目3番25号 電話 023-641-1212

印刷 田宮印刷株式会社

〒990-8540 山形県山形市立谷川三丁目1410-1 電話 023-686-6111

